

谷賢一『福島三部作』における「わが町」

伊藤ゆかり

“Our Town” in *The Fukushima Trilogy* by Kenichi Tani

ITO Yukari

Abstract

Kenichi Tani's *The Fukushima Trilogy* (2019) relates the fifty-year history of both a Fukushima town and the Hozumi family whose destiny is intertwined with the nuclear power plants. Part 1, *1961: The Sun Which Rises at Night*, describes how the town decides to construct a nuclear power plant. In Part 2, *1986: Mobius' Ring*, its protagonist, a long-term critic of nuclear technology, is driven into a paradoxical position of enacting policies geared toward the nuclear power industry as the mayor. Part 3, *2011: The Words to Be Spoken*, focuses on a local TV station struggling to show the post-earthquake lives of inhabitants.

This paper mainly analyzes the second play of the trilogy, which is partly inspired by Thornton Wilder's *Our Town* (1938). In it, the Stage Manager represents everyday life in a small American town while *1986: Mobius' Ring* has the Hozumi family's dog as the narrator. The dog's words reveal the particularity and the universality of the town where the nuclear power plants are located. Furthermore, the dog shows the risk of using imagination for technology. Tani's trilogy urges the audience to consider the danger of imagination as well as its potential for understanding the agony of disaster victims.

キーワード：谷賢一、『福島三部作』、『1986年：メビウスの輪』、原発事故、『わが町』

key words: Kenichi Tani, *The Fukushima Trilogy*, *1986: Mobius' Rings*, nuclear power plant accidents, *Our Town*

I

2011年におきた東日本大震災が日本演劇に与えた衝撃は非常に大きい。当初その直接的影響は、津波がひき起こした福島第一原子力発電所事故による首都圏の停電および電力ひっ迫が原因の上演中止という形をとった。¹⁾ 震災の翌月には上演はほぼ予定通り行われたが、以降演劇の作り手たちは、大震災とその後をいかに演劇で描くかという課題に取り組むことになった。中西理は、2011年に早くも高校演劇では、被災した高校生によって震災を描く劇が多く作られた、と指摘している。²⁾ また、同じ年に上演された前川知大の『奇ッ怪

其の式』は、数年前の地震と硫化ガスにより廃墟となった村を舞台とし、間接的に東日本大震災に言及したといえる。岡田利規による『現在地』(2012)も、災害の予兆および災害による大規模な避難を題材とし、震災についての寓話的な作品とみなすことができよう。以後、東日本大震災を直接的、間接的に描く多くの劇が作られ続けている。そのなかから本論文で取り上げるのは、2019年に谷賢一の作・演出によって上演された『福島三部作』である。³⁾ タイトルから想像がつくように、東日本大震災による福島第一原発の事故を題材とし、福島県双葉町を主な舞台に原発誘致から大震災後までの歴史をたどることで、いかに

原発が建てられ、それが何をもたらしたかを描き、高い評価を得た。⁴⁾ここでは第二部の『1986年：メビウスの輪』を中心に分析を行うが、最初にあらすじとともに三部作の全体像を示したい。

『福島三部作』は、1961年、1986年、2011年という三つの時代を、双葉町の住民である穂積家をとおして描いた劇である。第一部『1961年：夜に昇る太陽』は、福島県双葉町における原発建設までの経緯を描き、同じ双葉町を舞台とする第二部『1986年：メビウスの輪』は、チェルノブイリ原発事故を背景にしつつ、原発に反対してきた人間すら取り込む原発政治を浮かび上がらせる。そして第三部『2011年：語られたが言葉たち』は、主に福島市を舞台にして、被災者報道という難題に取り組むテレビ局のスタッフの視点から震災後の福島県を描写する。第一部は、冒頭の第0景で、2011年大震災後の穂積家の一部屋を示し、最後の場面である第十景で同じ場所に戻り、いわば第三部を予告するという構成になっている。第一部と第二部においては、劇の時代設定と関連する歴史的出来事を随時字幕で映し出し、観客の理解を助ける。また、写實的に登場人物を描く場面が多い一方で、人形劇やミュージカルもどきの場面もあり、多様な手法で50年におよぶ福島県の原発をめぐる歴史を浮かび上がらせる。

谷は、あるインタビューにおいて、この作品を書いたそもそもの発端は、彼の父親が原発に出入りする技術者だったことだ、と述べている。父から、原発は日本の技術の粋を尽くしたものだと言われ、原発の安全性を疑っていなかった。だが、知識が増えるにつれて原発に対する疑念が強まり、JOCやチェルノブイリの事故、そして東日本大震災後の事故が決定的になって、その危険性について発信するのを感じたと言う。また、2011年を描いただけでは、原発誘致当時から始まる問題の根深さが分からないという思いから、時代の流れを感じられる三部作を構想した。⁵⁾そして、2016年7月から書籍や新聞などによる資料調査を開始し、さらに福島県におけるフィールドワークとインタビューを行う現地調査を2度行ったことを戯曲のあとがきで説明してい

る(325)。最終的には2年間の取材、1年間の執筆と稽古期間の後に完成した作品のあらすじは、以下のとおりである。

第一部『1961年：夜に昇る太陽』は、双葉町議会が原発誘致を決定する数日前である1961年10月17日から19日までを描く。常磐線急行列車が出る上野駅で始まる第一景において、東京大学で物理を専攻している穂積家の長男、孝が、列車のなかで、彼と同じく双葉町に行く途中の佐伯という30代の男性と、彼を「先生」と呼ぶ三上という20代の女性と話す。卒業後も双葉町に帰って農家を継ぐつもりはないという孝に、佐伯は終戦後の日本の発展を語り、福島も発展するだろうと言う。それに関連して、佐伯は孝に、アインシュタインの「想像力は世界よりも常に広い」という言葉を教え、人間はまだ世の中になくものを想像し、実現する、と語る(12)。三部作をとおして、この人間の想像力とはなにかということが問われることになる。

第二景から舞台が双葉町になり、1961年当時の日本および双葉町の経済・社会状況と、否応なくその影響を受ける穂積家および周辺の人々を描き出す。孝の末の弟で、3歳の真が兄の帰りを待つ間に友達とけんかになる第三景では、子どもは『ひょっこりひょうたん島』もどきで人形が演じるよう劇作家による指定がある。⁶⁾また、登山客風の男が町を歩き回っていること、佐伯と三上が町長の田中を訪ねてきたことがわかり、町に何か起きようとしていることが示唆される。第三景の舞台は穂積家である。孝の父は炭鉱に出稼ぎに行っているため、孝は、東京に残るという決心を祖父の正に話し、勘当を告げられる。第四景は町の広場を舞台とし、孝が恋人の美弥と会っている。そこに孝の弟、忠が加わって、3人の若者はそれぞれ故郷に対する複雑な思いを語る。忠は、青年団で活動するなかで町の閉塞的状況を肌で感じながらも、できることを探そうとしており、兄の代わりに家を継ぐ覚悟である。母の豊も、双葉町に孝を引き留めるものはないと思っている。

第七景で、双葉町への原発誘致が決定的となる。佐伯と三上が東京電力原子力開発部の研究員であ

り、町を歩き回る謎の男、酒井は福島県庁から派遣されて、原子力発電所の建設立地適正調査をしていたことがわかる。彼らは田中町長とともに穂積家を訪れ、双葉町に原子力発電所を建設する予定だと話すのである。3人の話から、観客は、穂積家の人々とともに、1954年に原子力推進を政府が決定してからの原発をめぐる国内の動きを知り、1960年には福島県議会が原発誘致を決めていたことも知る。双葉町には将来への展望がないと孝や忠が語っていることを考えれば、原発建設は町にとって必然的な決定であることが観客にもわかる。豊や孝、忠は、原発への危惧を口にするが、佐伯に反論され、そのうえ、広島出身だからこそ原発の安全性がわかっていると言う佐伯に何も言えなくなる。さらに、祖父の正に対して、原発建設のために穂積家の土地を買い、と莫大な金額が提示され、原発によっていかに大金が動くかがわかる。場面の最後で正が土地の売却を決め、田中町長らは双葉町の明るい未来を願って乾杯をする。このように、第七景は、1961年の日本における原子力発電に関わる状況を示すと同時に、原発誘致に際して日本国内のさまざまな家で行われたかもしれないやりとりを描き、第一部の中心をなす場面となっている。

第八景では、恋人の美弥に双葉町に残ると言われて、孝が一人東京に去る。つづいて、東京の料亭を舞台に、佐伯が原発誘致状況を政治家に説明している。この原発誘致の50年後の結果を観客に見せるのが、震災後の穂積家を舞台とする第十景である。放射線量が高いにもかかわらず、忠に頼まれてアルバムを取りに来た美弥と真が急ぎ家を去るところで第一部は終わる。

第二部『1985年：メビウスの輪』において、第一景から第五景までは1985年10月20日前後のある日の穂積家を描き、第六景から第八景は1986年5月初旬の双葉町役場町長室を舞台とし、最後の第九景で再び舞台は穂積家の居間に戻る。主人公は44歳になった穂積忠である。兄、孝の恋人だった美弥と結婚し、酒屋を営んでいる。娘二人は独立しており、高校生の息子、久との3人暮らしである。忠は、原発反対運動のリーダーと

して県議会議員を一期務めたものの、もう政治には関わらないと家族に約束している。にもかかわらず、田中町長の公金不正支出が明るみになって開催された町民大会で演説をしてしまう。その忠を、県議会議員の丸富と、双葉町議員の秘書を務める吉岡が訪れ、田中町長の辞職が決まったことを受けて、町長選挙に立候補をするよう説得する。原発反対の自分が票を集められるはずはない、と忠は断るが、原発に賛成しつつ、その危険を訴えればよい、と吉岡は言う。原発で豊かになった双葉町の経済を維持するためには、政府や東電から金をもらいつづけるしか道はなく、それを要求するのは、原発の危険を叫びつづけた忠こそが適任だと言うのである。この論理のねじれは、表側がいつのまにか裏側になるメビウスの輪そのものであり、忠はそれに気づきながらも、町を守るために、と選挙に出ることを承諾する。

翌1986年、忠は町長としてチェルノブイリ原発事故への対処を迫られ、町長室で、吉岡、丸富および次女の結婚相手である徳田と会う。徳田からチェルノブイリ事故に関する情報を集めたかったのだ。彼の説明を聞いて、忠は、第一原発の運転を停止し、緊急点検を行うべきだと話す。全員に反対される。運転の停止は、双葉町の原発に事故の可能性があることを意味し、にもかかわらず運転させてきたことをどう説明するのか、と吉岡に詰問される。忠は、またしても論理を捻じ曲げられて、記者会見で、チェルノブイリのような事故は日本ではありえない、と日本の原発の安全性を主張することになる。この第八景の記者会見では、忠がロックバンド風のメイクで登場し、ミュージカルもどきの場面となる。第九景において、帰宅した忠を息子の久は責め、忠は苦悩するが、徳田が妻、聡子の妊娠を告げに訪れたため、一緒に喜び、劇は終わる。

第二部の最大の特徴は、語り手を穂積家の愛犬モモが務めることである。モモは高齢のうえガンにかかっている、劇の冒頭で自分の死を予感しており、間もなく死ぬ。以降、死んだモモが、時には町の状況を説明し、時には登場人物のことばに答える。この語りの効果については次節で検証する。

第三部『2011年：語られたがる言葉たち』は、双葉町を離れ、主に福島市を舞台とし、2011年12月11日にはじまる数日間を描く。第一景は「201103111446」というタイトルで、開演と同時に衝撃音と照明によって地震の発生が示され、つづいて、津波からの避難指示のアナウンス、さらに、津波後の東北の様子を上空から伝えるニュースの音声がかかる。舞台上に倒れている多くの人びとのなかから一人が起き上がり、客席に向かって、「私たちは見つけて欲しかった。私たちは死にたくなかった」と、死者たちのことばを伝える(232)。第二景では、ある病院の一室で東日本大震災が起きた3月11日だと思込んでいる老人、すなわち穂積忠を妻の美弥がなだめている。それをテレビユー福島の記事局長となった53歳の穂積真と、部下の小田真理が見つめる。この老人は第七景と第十一景にも現れ、19歳、44歳、69歳の忠である「幻の人」も登場する。第十一景で、忠は幻の人に導かれて舞台を去る。

第三部は、第一景および忠が登場する場面を除き、テレビユー福島の記事局長と彼らが取材をする被災者たちを描く。前述した谷による取材と現地調査に基づいており、第一景から想像がつくように、描写は非常に生々しい。震災の50年前を描く第一部はもちろん、1985年に設定された第二部も歴史のなかに位置づけられるのに対して、第三部は直近の出来事であることに加えて、ここに描かれるテレビ局員たちの苦闘も、被災者たちの悲痛な思いもまだ続いていることが観客に伝わるからであろう。

真は記事局長として、「福島県民に、生きる自信と誇りを取り戻す」ことを報道の指針としているが、それがどのような報道なのか、局員の間でも見方は分かれ、試行錯誤が続く。塩崎、そして最終的には不破も、民放である以上視聴率を上げる必要があるという立場であり、特に塩崎の意見に小田真理は賛成できないことが多い。彼らが取材する被災者たちの苦悩はさまざまである。同じ福島県の被災者といっても、出身地および家族に死者か行方不明者がいるかどうかによって、恨みや罪悪感が生まれ、分断されていく。さらに原発

事故の被災者は、被曝をめぐって苦しめられる。飯館村から避難した高校生、美月はインターネット上で被曝の危険を訴えて注目を集める一方、郡山の避難所で会った若い女性、高坂から、放射能に汚染されている、と罵られた体験をもつ。だが、高坂自身、浪江町から県外に一時避難していた間、妹とともに「放射能」と呼ばれるいじめを経験したことがわかる。二人のやりとりをたまたま録画した塩崎は、特別番組でそれを使うという提案をして、不破の支持を得るが、真理は反対する。真は、自分たちが知らない、語られるべきことが残っているのではないかと、言う。そこに不破が以前取材をしようとした際、語ることを拒絶した双葉町からの被災者である荒島が現れる。話したくてたまらなくなった、と彼は言い、津波によってどのように妻と娘が行方不明となったか、語り始める。さらに、テレビで話せば、二人について何かわかるかもしれないので、テレビに出してくれ、と言う。荒島の話聞いた真は、被災者一人一人の話を、無理に一つの物語にはせず、そのまま並べることによって被災の一つの形を示すことができるのではないかと、言う。第十三景において、真はテレビ局を辞めて飯館村の職員となったことを真理が話して第三部は終わる。

II

『福島三部作』は、あらずじからわかるように、双葉町の第一原発をめぐる物語を可能な限り多角的に描いた劇である。本論文では第二部『1985年：メビウスの輪』に焦点をあてることとする。谷自身が第二部について最も戯曲としての完成度が最も高いと述べ、その理由として、原発反対派だった男が推進派となるねじれた精神性が描けていることと、飼い犬のモモによる人間社会の観察、風刺、意見が描けていることを挙げている。⁷⁾ここで注目したいのは後者の犬のモモによる語りである。戯曲につけた注解において、谷は次のように説明している。

モモの明確なモチーフはソーントン・ワイルダール作『わが町』で語り部を務める「舞台

監督」役である。もっとも犬と舞台監督では大違いだし、拙作をワイルダーの詩と哲学に彩られた傑作戯曲と比べるのは大変おこがましいが、どちらの作品も「わが町」を語っており、どちらの人物（？）も町の間人模様を俯瞰しており、時間・空間を大きく超越したレベルで世界を語る……という点で共通している。(215)

また、第二部はモモの語りとともに終わるが、彼女はそこで「おらほの町はもう11時。ではみなさんも、ぐっすりご休息を。おぼんです……」と、谷が注解で述べるように、『わが町』の語り手である舞台監督の劇中最後の台詞を言う(214、223)。⁸⁾ 引用した谷の注解にはうなずける点が多いものの、その一方で、我々は『メビウスの輪』と『わが町』の違いを意識せざるを得ない。以降で、語り手の存在という共通点がいかに2作品の相違を浮かび上がらせるか検証するが、その前に『わが町』について、簡単に説明したい。

『わが町』*Our Town*はアメリカの劇作家・小説家であるThornton Wilder(1897-1975)の代表作であり、アメリカ演劇史上もっとも有名な作品のひとつである。1938年の初演が大成功をおさめて以来、現在に至るまで商業演劇であるかないかを問わず、さまざまな劇場で上演されていて、「世界中のどこかで『わが町』を上演していない日はない」とまで言われた。舞台は、ニューハンプシャー州の小さな町Grover's Cornersで、1901年5月7日の夜明け直前に劇は始まる。

劇に関して注目すべきことのひとつは、ワイルダーが用いた非写実的手法である。写実的手法を用いる作品が多いアメリカ演劇において、初演の1938年における画期性は無視できない。非写実的手法はまず舞台設定に表れる。幕が開くと、そこは裸舞台で、舞台監督がテーブル、椅子とベンチを持ってくる。つづいて運び込まれる格子は、家の庭を表す。このように、随時必要となる舞台装置のみ、しかも非常に簡素なものが使用され、あとは観客の想像力にまかされる。さらに重要な非写実的手法は舞台監督という存在である。舞台

監督は、幕開きでは劇の題名と劇作家名、配役などスタッフの名前を言い、一幕と二幕の最後には休憩に入ることを告げる。それにとどまらず、劇中でさまざまな説明をする語り手であり、なおかつ、登場人物の一人として台詞を言うこともある。舞台監督は町のことも、登場人物のことも、劇中では描かれない未来のことすら知っている。たとえば、劇が始まって間もなく登場する新聞配達の少年について、奨学金をもらって大学に行き、首席で卒業するが、戦争で死ぬという未来を語って、観客に人生の残酷さの一端を知らしめる。アメリカの劇作家Donald Marguliesは、このようなワイルダーの手法の革新性について、執筆された1937年において、背景のない裸舞台などほとんど聞いたこともなかったし、舞台監督の存在は驚くほど現代的だ、と述べている。⁹⁾

『わが町』の第一幕と第二幕は、グローヴァーズ・コーナースの日常生活を描く。第一幕は町および住人たちの紹介が主な内容である。舞台監督自らが一幕のタイトルは「日常生活」だと述べるように(48)、ごくありふれた日の普通の人々が舞台上に登場する。その一方で、舞台監督は大学教授を舞台上に呼び、町の地質的特徴を何億年も前まで遡って説明させる。また、町の新聞の発行者兼編集者であるWebbが、町がどのような社会・政治状況なのかを説明する等、あらゆる角度から小さな町が描かれる。第一幕から3年経っている第二幕は「愛と結婚」と題して、若者が人生の岐路に立つ様子に焦点を当てる。Emily Webbと医師の息子であるGeorge Gibbsが幼馴染という関係から、異性として意識し始め、舞台監督が牧師役を務めるなか結婚に至るまでを、ときには過去に遡って、観客に示す。

結婚の後に描かれるものは死である。第二幕から9年後である第三幕が開くと、観客に向かって椅子が横に3列並べられており、墓地を示す。椅子に座っているのは、グローヴァーズ・コーナースの死者たちである。舞台監督は9年間に起きた町の変化を説明した後、死について語り、死者は生きている者たちに対して無関心になっていく、と述べる。出産中に亡くなったエミリーの葬式が

始まって間もなく、エミリーが死者たちのところにやってくる。死んだばかりのエミリーは、ほかの死者の反対にもかかわらず、12歳の誕生日の朝に戻る。初めは元の世界に戻った喜びを感じるが、やがて生きている者は生を理解していないことを思い知り、死者たちの世界に戻ってくる。夜が訪れ、舞台監督はゆっくりと黒い幕を引きながら、夜のグローヴァーズ・コーナーズと空の星のことを語り、地球には16時間ごとに眠りが必要だと言って、観客にもおやすみと言う(111-12)。

このように『わが町』においては、舞台監督が文字通り劇を動かす。『1986年：メビウスの輪』における語り手のモモはどうであろうか。劇が始まると、大きなぬいぐるみのようなモモが「ボロ雑巾のように力をなくし」横たわっていて、それには俳優が操作できる取っ手がついている。モモを操作するのは、隣に立つモモ役の俳優である(123)。¹⁰⁾ 第一景は「モモの死」というタイトルで、モモは、その朝が非常に寒く、その分非常に美しかったと言い、その日自分が死ぬということを知っていた、と語る。モモが死ぬとは思ってもいない忠は、犬を散歩に連れだす。モモは、忠と土手を登りながら双葉町を眺め、町の美しさを称えるとき、15年間でいかに原発によって町が変わったかを説明する。しかし、モモはそれ以上歩くことができず、医者に注射を打ってもらった後、茶の間で死んでしまう。

以後、モモは劇中の出来事を観察し、時に口をはさむが、『わが町』の舞台監督のように登場人物の一人となることはない。死んだ直後はモモの声が忠に聞こえることもあるが、それもなくなり、第二部の終わり近くで、忠の息子である久にモモの声が届くまで、そのことばを聞くのは観客だけである。時にはモモは観客の代弁者となり、チェルノブイリ事故に関する記者会見がミュージカル形式による場面となったときは、「エーッ!? マジでー!」と叫び(199)、忠が記者に向かって日本の原発は安全だと繰り返すと、「お父さんが嘘ばかり言っている!」と言う(201)。また、舞台監督と同質の語りを行うこともある。劇冒頭の変葉町の変化を説明する箇所や、第六景における

チェルノブイリ事故の説明をする箇所である。空中に浮かび上がったモモが以下のように語る箇所は、『わが町』の第三幕における死者たちの姿を思い起こさせる。

死ぬ前にはあれほど特別だと思われていた死が、こんなにもありふれた、普通のことだと気づくのに時間はかかりませんでした。命があまねくこの地上を満たしているように、死もまたあまねくこの地上や空中を満たしています。生者だけでなく死者もまた、地上を歩き回り、僕たちは挨拶を交わします。死者と語り合えることに気がついていないのは、どうやら人間だけのようです。(176)

ここでのモモは、生きている人間たちの世界を俯瞰し、生と死に同じ価値をおく点で舞台監督と同質の存在に思われる。谷が、舞台監督を「モモの明確なモチーフ」としているとおりである。

一方で、モモが舞台監督と異なるのは、登場人物、特に忠に向かって訴えかけることである。第九景において、記者会見から戻った忠を久が責めるとき、モモはハイデgger哲学を使って、「お父さんには、いろいろなお父さんの在り様がある。すなわち世界内存在として、わかってやって下さい」と、父親を理解するよう久に訴えかける(208)。久にはモモの声が届くのだが、父を許そうとはせず、その場を去る。残った忠は、妻の美弥にだけ本当のことを言ってもいいか、と問いかける。モモは、今度は忠に「言うんです、お父さん! 今ならお父さんは、お父さんとしての本来性を取り戻せます!」と訴える(210)。だが、そこに徳田がやってきたため、忠が本心を語る機会は失われる。モモは、観客に語りかける。

そうなんです。死者たちの声はいつもあまりにも小さく、ささやかで、生者たちの放つ騒がしい声にかき消されてしまうのです。しかしいつも、本当は、聴こえているはずですよ。あなたを取り囲む死者たちの、ささやくような声が……。聴こえますか? あなたには聴

こえますか？

おらたちは今も、語り掛けているのです。おらのような犬も、じさまたちも、この地にまで広がったチェルノブイリの死者たちも……。 (213)

さらにモモは忠がすっかり変わってしまったと話し、以前の忠と今の忠のどちらが本当なのかかわからない、と言う。そして、再度「これが人間というもんですか！ おらたちの声は聴こえませんか？」と訴えかけた後、『わが町』と同じセリフを言って、第二部は終わる (214)。

モモがこのように訴えるということが、『わが町』と『メビウスの輪』の最も大きな違いを生み出している。『わが町』の舞台監督は、観客にせよ、登場人物にせよ、モモがするように訴えかけることはしない。舞台監督の語りにおける特徴は、全体像を俯瞰しつつ語るということにある。劇の冒頭の説明は、町の地理の説明であり、どこに何があるかを語る。つねに上から町をみている人間のように、町全体がどのような姿かを熟知しているからこそ、できることである。前述したように、歴史をはるかに遡って、町の地質について話すのは、大学教授であって、舞台監督ではない。しかし、地球全体を見つめ、地球の誕生に始まる歴史を見つめるまなざしがあるからこそ、教授に説明を頼むことができるのである。ある時ははるか遠くから、またある時は間近から町とその住人たちを観察し、登場人物として他の人々の行動に介入できる舞台監督は、登場人物にも観客にも訴えかける必要はない。これに対して、犬であるモモには、そもそも人間に言葉を伝えるべきがない。死ぬことで生と死について理解を深めるにもかかわらず、それを人間に伝えることは、生前できなかったのと同様にできないのだ。モモにできることは、たとえ人間の耳に届かないとしても、訴えかけるだけである。

モモと舞台監督の語りの違いは、劇全体が普遍性と特殊性のどちらを強調しているかということと結びつく。『わが町』の舞台監督は、グローヴァーズ・コーナースの地質的特徴や社会的状況を説明

するなど、この町にこだわり、一見したところ町の特殊性を強調しているように思える。しかし、ここで描かれるのは、どの町にもいるような人々であり、どの時代にも起こることである。舞台監督は、地球上のいたるところで、グローヴァーズ・コーナースと同じように人々が生活していることを伝えることで、観客がグローヴァーズ・コーナースと自分が生まれ育った町は同じだという思いを抱くことを目指している。象徴的なのは第二幕におけるエミリーとジョージの結婚式の場面である。舞台監督は、何百万という男女が結婚してきたことを述べ、興味深い結婚は千分の一だ、と言って、多くの人間にとって人生の一大事である結婚が、いかにありふれていて、どれでも同じかを指摘する (82)。また、死者が主要な登場人物となる第三幕も同じである。死者にとって、生きている時の出来事や人間関係は意味をもたなくなり、ただ生と死があるだけなのだ。

このように、『わが町』は、劇中で描かれることはすべて特別なことではないことを示す。唯一特殊なものとされるのは地球である。すなわち、劇を終える直前に、舞台監督は、夜空の星には生き物はまったく住んでいないという学説が出てきているが、この星だけは成功しようと懸命にがんばっている、と語る (111)。生き物、とりわけ人間が住む地球は、宇宙の中で特別なものであるからこそ、地球上のどの場所も違いはなく、人間が生きて、死んだ場所であることだけが意味をもつ。すなわち、タイトルになっている「わが町」とは、「わたしたち人間が住む町」であり、言い換えれば世界中のどの場所も「わが町」になり得る。このように、ワイルダーの『わが町』は、地球という特殊な星における「わが町」の普遍性を描き出した劇とみなすことができる。¹¹⁾

それに対して、谷が描く「わが町」が双葉町であることは、やはり自明のことに思える。1961年の双葉町を描いた第一部に続く劇であることにくわえ、劇の中心が穂積一家であり、彼ら家族は双葉町の歴史とからみあっているだけに、双葉町がモモも含めた住民にとって唯一無二の特別な町であることを犬が語っているという印象を与え

る。そもそも、第二部の冒頭で、モモは自分が死ぬ日の朝が「おそろしく素晴らしい一日の始まり」だとわかった、と特別な朝であることを述べる(124)。忠との散歩では、土手を登り、左側に見渡せる町と右側に見渡せる海の美しさを述べ、右の遠方に「真っ白いお豆腐みてえな原子力発電所が」見えることを語って、「おらこの町しか知らねけんちょ、こんなに美しい町は世界に二つとねえべなあと、ワンワンワン！」と言う(125)。さらに15年間の双葉町の変化を説明し、生きることは変化することだから、「町は生きていて、いつもおらに声をかけてくれる。そんでおらはこの土手っ腹から、元気にお返事を返すんです」と、自分と「わが町」双葉町との特別な関係を語るのである(126)。

しかし、死後、新たな目で世界を見つめるようになって、モモの語りは変化する。町を見下ろし、「エキサイティングだった」町の営みが同じことの繰り返しであることに気づき(175)、死は特別なものではなく、死者たちは「日本中、いえ地球上あちこちで」挨拶を繰り返していることに気づく(176)。モモは、舞台監督のように、普遍性を語るようになるのだ。徳永京子は、谷がなぜ福島県で原発事故が起きなければならなかったかという問いに取り組むなかで、「特定の町、そこに暮らす人々、中でも1つの家族に焦点を絞って向き合うことに決めたのだろう」と推察し、さらに、双葉町で50年間に起きたことを基にしながらも、「普遍的なドラマを内包し、ほかの土地でもシンパシーを生み得る柔軟性を持つ」と、特殊性と普遍性の共存を指摘する。¹²⁾ その普遍性は、『わが町』のような地球上すべての場所がもつ普遍性とも考えられるが、モモが劇の終わり近くにチェルノブイリの死者たちに言及することから、「原発のある町」としての普遍性だと考えられる。

このように普遍的な場所としての双葉町を描きながらも、最終的に『メビウスの輪』は、モモにとって唯一の「わが町」としての双葉町を観客に見せる。特殊性を強調するのが、語り手としてのモモの訴えである。原発の安全性を断言した記者会見の後、忠は家で自分の父の話をする。モモは

忠の父が死んでも家族の元にとどまり続けていると言って、死者は生者に声をかけ続けている、と言う。この劇における死者は、生者に対する関心を失った『わが町』における死者とは異なり、生者を見つめ、声をかけ続けるのだ。声をかける相手は何らかの関わりをもつ者であろう。実際にモモは、穂積家の人々に対して、「おらたちの声を、聴いてくんちょ！」と訴えかける(205)。また、忠が妻に対して、原発の安全性を否定しようとするとき、モモは、「本当の言葉を語ることで、人間は、本来の生を取り戻すのです！」と一般論のように話し始めるが、つづいて、「そこだ、お父さん！ 言うんです！ 本来の生を、取り戻すのです！」と、忠に訴えかける(210)。劇が終わる直前の「これが人間というもんですか！ おらたちの声は聴こえませんか？」という台詞にしても(214)、直前に忠の変化について語っていることから、観客およびすべての生者に語りかける以上に、強く忠に訴えかけていることがわかる。『メビウスの輪』は、普遍性と特殊性の双方をもちながらも、モモの語りと訴えをとおして、ほかとは取り替えることができないわが町としての双葉町とそこに住む人々を描く劇なのである。

III

ここでは『福島三部作』全体について検証することとする。まず、『わが町』というモチーフは、劇全体においてどのような効果を上げているのだろうか。特記すべきは、第三部『2011年：語られたがる言葉たち』の場所が主に福島県福島市であること、さらに舞台は「どこだかわからない場所」とあり、老人の入院先である病院だったり、テレビ局の会議室であったり、災害公営住宅であったりすることである([227])。原発事故のために数時間しか滞在できなくなった双葉町を第三部の舞台とすることはできず、主な舞台は福島市となる。そして、登場人物は、自分が今いる場所が本当にいるべき場所なのか確信がもてないため、「どこだかわからない場所」にいる。ジャーナリストとして震災の被害を報道するという明確

な役割があるテレビ局員たちですら、報道はどうあるべきか迷い続ける点で、どこかわからない場所にいると言えるのだ。第一部では、双葉町が原発建設の場所となることの必然性を描き、第二部では『わが町』を最大限に生かし、普遍的でありながら、特殊性をもつ「わが町」としての双葉町を描いているからこそ、第三部の登場人物たちのよるべなさを示唆する舞台設定が可能となった。

つづいて、『福島三部作』における想像力について考えたい。第一部『1961年：夜に昇る太陽』の第一景で、佐伯は、「想像力は知識よりも重要だ。知識には限界がある。想像力は世界よりも常に広い」というアインシュタインのことばを引用し、「encircle、取り囲むという言葉を使っている。つまり、想像力が常に、世界を取り囲んでいる。人間の想像力は常に、世界よりもちょっとずつ外側に開いているわけだ」と孝に対して説明をする(12)。くわえてジュール・ヴェルヌのことばを引用して、「人間が想像できることは、人間が必ず実現できる」と言う(12)。これらのことばによって、佐伯は、実現できそうななかった技術が次々と現実のものになり、それによって社会は発展できるという主張をしている。この主張に基づいて、彼は原発建設を推進するのである。

地震による原発事故とその甚大な被害という、佐伯が言うところの人間の想像力の結果を知っているわれわれ観客は、彼の言葉に慄然とせざるを得ない。われわれ観客と共通する思いを抱くのは、モモである。第二部の第六景において、チェルノブイリ原発事故の説明をして、事故で拡散した放射能による死者の数が33人から98万人の間とされるほど、事故の実態が捉えられないことを話す。さらに、モモは犬と人間の違いを述べ、犬には車の運転はできないし、しない、と述べ、次のように語る。

犬は、自分の手に余ることをあまりしないアニマルなのです。しかし人間は、自分の両手よりも大きなものを動かしたり、頭より広いものを捉えようとしたりする、手に余るアニマルです。

こうして目に見えないほど広い範囲にチェルノブイリの光は広がり、留まりました。(178)

モモのことばは、人間は想像力を自らの手に余るような方法で用いることを示唆する。佐伯をはじめとする原発を推進した人々は、原発を建設することで地域社会を豊かにし、さらには原子力エネルギーによる社会の発展を想像した。しかし、原発に依存することで社会や経済が歪むこと、何よりも事故が起きた時に何が起きるかは想像できなかった。というより、そのような負の結果を想像することを拒んだのである。『福島三部作』は、第一部において、より多くの人間の想像力が原子力に向かいつつある状況、第二部ではその負の結果が表れ始めた様子を描く。つづく第三部は、原発が壊滅的な被害を与えた後の福島を、安易な想像を拒否する生々しさとともに描き出す。69才の老人になり、病院のベッドに拘束されてほとんどの時間を眠りながら、過去の記憶と幻のなかにいる忠について、妻の美弥が言うことばが象徴的である。真が「何もかも忘れたまま、生きていくわけにもいかないでしょう」と言うと、美弥は、「逆だあ。生きてくつつうのは、忘れてくことだ」と、想像するどころか、思い出すこと、考えること自体のつらさを語る(234)。このように、第一部は人間がどれほど貪欲に想像力を用いるかを示し、第二部では想像力が時には手に余ること、そして第三部は想像力の拒否を描く。すなわち、『福島三部作』は、人間の想像力に関する劇とみなすことができよう。

第三部において、さまざまな被災者の苦しみや悲しみが描かれる。それらは、ひとりひとり異なる特殊性をもち、想像することすら拒む苦悩である。にもかかわらず、第三部まで観た時、われわれは想像力を使うことの必要性を再確認する。それを示すのが、真の次のことばである。

だけんちょ、もしかずっと本当はまだ、おらたちが知らないだけで……語られるべきことは残されてんのかもしんね。福島は何かを、

語り掛けてんのかもしんね。そして本当に語るべきこと、語られるべきことが語られたなら、すべての人は耳を傾けてくれるかもしんね。福島に。福島の語ることに。(299-300)

われわれは、真のように、語られるべき言葉があるということを想像しなければならない。その言葉がどんなものかは想像できないし、すべきでもないが、自分の苦しみを語りたいと思っている人間がどこかにいることを想像し続けるべきなのである。それが、この劇をとおして作者の谷がしていることでもある。第二部において、モモは、原発をもつ町の美しさを語る。町の政治や経済を歪めた原発があっても、それを含めた町の営みに美しさを見出すのが作家の想像力である。われわれは作家の想像力の所産をみることで、同様に想像力を用いるよう求められる。観客は、理解は不可能であっても、被災者たちのそれぞれ特殊な苦しみを想像しようと努力し、彼らの苦悩がチェルノブイリ事故の被災者や、ほかの災害の犠牲者の苦しみや悲しみと結びつく普遍性があることを想像しなければならないのである。

『福島三部作』は福島県における原発の建設から原発事故の被害までの歴史を描き、そこにみられる特殊性と普遍性を、ワイルダーの『わが町』をモチーフとすることで浮かび上がらせた。同時に、原発事故をもたらした人間の想像力の恐ろしさと、被害者の苦悩をみつめようとする想像力の可能性を観客に示している。

注

- 1) 電力ひっ迫にくわえて、非常時に演劇上演はふさわしくないという雰囲気もあった。コロナウィルス感染拡大後の全世界的な上演中止によって、演劇に関わる者はこの問題に再度向かい合うことになった。
- 2) 「演劇は震災をどう描いたのか? 東日本大震災から10年 震災劇ベストアクトを選ぶ—中西理の下北沢通信」<https://simokitazawa.hatenablog.com/entry/2021/03/11/092622>
- 3) 『戯曲 福島三部作』記載の上演記録にあるように、三部作通しての初演は2019年だが、第一部のみ2018年に先行上演を行っている。谷賢一『戯曲 福島三部作』、而立書房、2019年、p. 322および<https://www.dcpop.org/category/works>。なお、以降戯曲からの引用はこのテキストを用い、ページ数のみ括弧内に記す。
- 4) 『福島三部作』は2020年に岸田國土戯曲賞および鶴屋南北賞を受賞した。それまで演出家としての取り組みが注目されることが多かった谷の劇作家としての地位を確立した作品といえよう。
- 5) 谷賢一、「谷賢一」『えんぶ』、2019年12月号、p. 38。(インタビュー記事、構成：釣巻敏康、文：園田喬し)
- 6) ここで谷は「ひょっこりひょうたん島を思い出して欲しい。ちなみに私は本気でこのト書きを書いている」と記している(23)。戯曲において、谷はト書きと注をとおして、自らの意図と資料を明らかにしている。
- 7) 谷賢一、『えんぶ』、p. 39。
- 8) 『わが町』における舞台監督の最後の台詞は、“Hm… Eleven o'clock in Grover's Corners.—You get a good rest, too. Good night.”である。Thornton Wilder, *Our Town: A Play in Three Acts* by Thornton Wilder (New York: HarperCollins, 2003) 112. 以下、同作品からの引用はすべてこのテキストを用い、括弧内にページ数を明記する。
- 9) Donald Margulies, “Foreword,” *Our Town* xiv, xv.
- 10) モモの性別は戯曲では明らかにされていない。名前からメスと推測される一方、劇中で自分のことを「僕」とも言っている(176)。初演時は女性が演じた。
- 11) ケンタッキー州ルイヴィルにおいて、『わが町』の朗読会を2か月に一度行っている俳優のGregory Maupinは、劇にみられる特殊性と普遍性について、ある特定の時代の特定の場所における特定の日の個別の出来事が普遍的に思える、と指摘している。Howard Sherman, *Another Day's Begun: Thornton Wilder's Our Town in the 21st Century* (London, Methuen Drama, 2021) 148.
- 12) 「ステージナタリー TRAM「福島三部作」スタッフ座談会+徳永京子による「福島三部作」評」<https://natalie.mu/stage/pp/tpam2021>